D 44

18世紀フランスモードの背景

日本女大家政　佐々井　啓

18世紀フランスは啓蒙主義の時代といわれ、多くの思想家が出現した。また一方では、サロンを中心とした社交が繰り広げられ、洗練された、優雅な室内装飾と服飾の好みが完成された。このような18世紀フランスの服飾の研究は、従来、絵画的な資料や遺品を中心とした形態的特徴を述べたものが多かったようである。

そこで本研究では、フランスモードの背景となった当時の啓蒙思想家たちの著作をとりあげ、服飾についてのさまざまな見解、批評などを検討することを目的とする。

資料としては，ルソー，モンテスキュー，ヴォルテール等の著作と，ディドロ，ダランベールによる「百科全書」等を中心とした。さらに、絵画、遺品資料と共に服飾に対する意識を探ってみた。

その結果、次のような特徴が挙げられる．

まず、当時の服飾の技術的な面を伝えるものとして、「百科全書」にみられる科学的、実証的な記述がある。そこには当時のコルセットやローブ、アビなどの裁断図がのせられており、基本的な服飾形態を知ることができる。

次に、服飾に対する諷刺や批判が、さまざまな形でなされていることである。それは、モンテスキューやルソーに顕著であり、とりわけルソーは、自ら服装改革を行って、自分の主張を貫いた。

最後に、東洋趣味や髪型の誇張にみられる空想の世界への憧憬である。これは現実の世界からの超越であるが、しかし高尚な遊びの精神に貫かれた美的な表現であった。